「YUKI、知ってる? 今年はウチら水瓶座ってすごくいい年なんだよ」

「え? ルミ、それってなんなの?」

「今年の水瓶座はね、12年に一度の大幸運期なんだって」

ルミの話に、ケイちゃんの目も輝いている。

「じゃあ、ウチら３人とも最高の年ってわけ!? マジですか—？」

YUKIはわけもなく心が弾んだ。

アルバムの評判がとっても良い。もうすぐ始まるツアーも、リハーサルの感触からしてむちゃむちゃカッコイイものになりそうだ。

ダイエットにも成功した。というより、ロンドンから帰ってきてからというもの、あまりの忙しさに食べても食べてもやせていく。

（けど、おっぱいまでだんだんちっちゃくなっていってる気がするのは、あたしの気のせい……?）

悩みといえばそのくらいのもので、YUKIは眠るのも惜しいくらい、毎日が楽しかった。

今年のバースデーは、同じ水瓶座のルミとケイちゃんと３人合同でパーティをやることになった。仲間のひとり、トモコがパーティを仕切ってくれるという。それぞれのボーイフレンド同士も仲良し、共通の友達もたくさんいる。

25才のバースデー・パーティ。場所は、行きつけのイタリアン・レストラン。みんなで食べて飲んで今日は騒ぐぞ！ と思いながら通い慣れた店内に入ると、どうも様子が違う。ゴージャスなのだ。

「えー！ トモコ、これ、どうしたの？」

「ビンゴだよ、ビンゴ。一式借りてきたよ。景品もばっちり用意したからね」

ゲーム・ソフトに雑貨、かわいい小物たち、といった小ぶりなものだけならご愛敬だが、ちょっとした家電から自転車まで用意してある。

「どーしたの、これ。大丈夫なの？ねえ？」

心配そうなYUKIをよそに、トモコたちは賑々しくワイン・グラスを手に取ると、乾杯の場を作る。

「YUKI、ルミ、ケイちゃん、お誕生日おめでとう！」

「おめでとう！」

花束を持って来てくれたマネージャーの柚上が、トモコと一緒にビンゴ大会を取り仕切り、豪華景品に仲間はみんな沸きに沸いた。

たくさん笑ってたくさんしゃべった。ルビーの色をしたおいしいワインをたくさん飲んだ。けれども、パスタやラザニア、手の込んだサラダや焼きたてのピザは、さっきから少しも口にしていない。

YUKIは胸がいっぱいだった。

（いい誕生日だなあ……。こんな誕生日、きっともうないかもなぁ）

消えていくものに愛しさを感じてしまうのは、YUKIの悪い癖だ。

どうもいつも異常なまでにそこに執着してしまう。そのあまり、自分で自分の勢いを消してしまうことさえある。消えていくものの儚さに心をとらわれ、思い出として完結させることがなかなかできないのだ。『THE POWER SOURCE』を作り始めたころから、冴えに冴えているとYUKIは自分でも思っていた。

こんなにフル回転に閃いちゃって、調子が良くて、あたしは本当にいいんだろうかと、あのころから心のどこかで思っていたのだ。

でもだからこそ、絶好調の自分、色鮮やかに過ぎていく日々の細かなことたちを、YUKIは忘れない。思い出を化石にはしない。

（この気持ち、絶対に忘れない）

気持ちを大事にしたい、YUKIはそう思っていた。

ツアーの合間につけたある日の日記にはこんなことを残している。

目が冴えてしまって眠れない。

この感覚は、良いときなので大切にします。

何か起きたときでも、起きないときでも、こうして字を書きたく

なるときが無性にあります。これは才能だと思います。

心と頭のなかの考えをまとめるのはつらいので、同時には出てこず、

途中ちょっと間違って、違う方向に向かってしまいますが、

でも書いていると落ち着きます。不思議だ。

25才の誕生日から10日後、POWER SAUCE DELIVERYツアーはスタートした。名古屋センチュリーホール、大阪城ホール、そして初めての代々木競技場第一体育館を含む全国25都市36公演。

古くからのファンの人たちも、初めてライブを観る新たなファンも、JUDY AND MARYのライブを待望していた。こんなにも待たれていたのかと客席の空気から感じて、オープニングで「BIRTHDAY SONG」を歌うとき、YUKIはいつも泣きそうになった。

チケットはすべてソールド・アウト。

アルバムは発売後すぐにダブル・ミリオンを記録した。

しかしそれと同時に、悲しい出来事もあった。

写真誌に狙われ、週刊誌のネタにされる。成功についてまわるよくある話と言ってしまえばそれまでだが、YUKIは心ない記事が掲載されることよりも、その背景に胸を痛めた。

<八方美人><ずるがしこいコ>——『同級生語る、YUKIの素顔』

記事の内容は（なんだ、それ？）という感じでしかない。身に覚えのないことがデフォルメされ、もっともらしく構成されている。

YUKIは、かつて同じ町に住み同じ学校に通っていた、名前も顔もよく知っている人間が、こんなふうに人のネタや写真を売ってしまうのかと思うと、悲しくてたまらなかったのだ。

「八方美人でずるがしこい？べつにいいじゃない」

「あなたの魅力は変わらないんだ。つまらないのは、そんなことを言う人のほうだと思うよ」

まだツアーの途中だというのにふさぎ込んでしまいそうになったとき、そう言って励ましてくれた大切な人がYUKIにはいる。近郊でライブをやるたび、歓声をあげてYUKIの姿を見守っていてくれた仲間がいる。

ツアー・ファイナル、代々木競技場のアンコールのステージでは最後の曲を演り終わったあと、誰からともなく近寄って、メンバー4人、ステージの上で抱き合った。この4人がそろって4年と数ヵ月、デビューして3年半。YUKIはたとえようのない達成感を感じていた。

アクエリアスにとって、今年は12年に一度の大幸運期——その波にのって、ツアー終了後、YUKIはひとりでロンドンへ行く。

１ヵ月、集中して英語を身につけるためだ。

とはいえ、初めての海外ひとり旅。ホテルがリザーブされていなかったりトランクの鍵をなくしたりと、始まりから前途多難な旅だった。

クイーンズ・イングリッシュを話すジョーイにみっちり鍛えられた。買い物をしたりライブを観たり、リージェンツ・パークでワインを飲んだり。スペインへも遊びに行った。ずっと一緒、会話は英語のみ。

疲れてしゃべりたくなくなって泣きそうで、すごく困って無口になったこともある。そんなときに届いていたミカからのFAXレターがうれしくてうれしくて、それを胸に頑張った。

「いつかJUDY AND MARYで英語の楽曲を作りたいね」

このひとり旅、そもそもの始まりはYUKIとスタッフとのこんなやりとりから決まった。それがまさか27才を迎える年に、あんなプロジェクトに参加することになるとは……。YUKIもスタッフも、夢にも思っていなかった。